

論文審査の結果の要旨

本論文は中国史上「異民族に侵略された乱世」の時代と否定的に見られてきた五胡十六国時代（304~439）に対して、遊牧民の活動や生活形態に力点を置き、また農業と牧畜の交錯地域に注目しながら、複雑に胡漢が融合する時代を明らかにしたものである。五胡十六国時代の五胡とは匈奴（トルコまたはモンゴル系）・羯（匈奴の別種）・鮮卑（モンゴルまたはトルコ系）・氐（チベット系）・羌（チベット系）の非漢族を指すが、実際には五胡 14 国に漢人 2 国を加えた 16 国が華北で 130 年の短期間に興亡した。とくに羯の後趙（319~349）と匈奴の大夏

（407~431）の五胡政権と、16 国のなかには含まれない漢人政権の冉魏（350~352）とを中心に提起し、胡漢の政治的関係を論ずる。筆者はオルドス、黄土高原、関中平原という環境の異なる地域の現地調査を多年にわたって実施し、とくにオルドスの草原に築かれた大夏の統万城には何度も中国側研究者とともに調査を続けてきたので、農牧交錯地域から五胡十六国政権の性格をとらえた見解は非常に説得力がある。

第一部「五胡十六国時代民族史への視点—研究史」では、一時全華北を統一した（四川・甘粛・陝西・山西・山東・河北・遼東）前秦（氐：351~394）の苻堅が漢人の東晋（317~420）を攻撃しながら敗北した淝水の戦い（383）と、それよりも前に最初に河西を除く華北を統一した後趙（羯：319~349）をめぐる中国での論争を取り上げる。前秦も後趙も漢民族を征服した非漢人国家であり、それが江南の漢民族の政権に大敗した歴史は、民族を表に出せば現在の少数民族問題にもつながる政治的な立場が問われることになる。筆者は中国での論争を丹念に

追いながら、中国では民族対立よりも階級問題を重視してきたこと、また漢族中心の中華民族史観、つまり大漢族主義に陥っていることを指摘し、中国では遊牧系諸民族や五胡政権の立場からの研究が困難であると断ずる。筆者の研究の立場を明確にする出発点となる考察といえる。

第二部「五胡十六国時代前期における民族関係—冉魏政権をめぐる」は、第一部でふれた後趙政権とそこから生まれてきた中原唯一の漢人王朝である冉魏政権（350~352）をとりあげる。とくに冉魏政権を樹立した漢人将軍冉閔が首都周辺で胡人 20 万人余を虐殺した事件が、たんに胡漢対立の構造ではとらえられない重要な問題を含んでおり、そこに筆者の独特の立場を表明する。東晋の漢人王朝と連帯することもなく、華北の漢人勢力を結集することもなく、圧倒的な胡人勢力のなかで無力な漢人の勢力の動向を描き出すことによって、胡漢対立、胡漢融合では捉えきれない歴史の真実を見いだしているように思われる。

第三部「五胡十六国時代後期における遊牧民の活動—大夏と統万城」は、匈奴鉄佛部の劉衛辰とその子の赫連勃勃がそれぞれオルドスに築いた代来城（白城台遺跡）と統万城を現地調査の成果に基づいてとりあげる。統万城も白城子と呼ばれたように白色を呈しているところに特徴があり、それはオルドスの草原にある石灰あるいは白土を用いて強化したからである。現在はムウス砂漠の南端の砂漠に位置するが、大夏（407~431）の時代は湖沼や河川、草原に囲まれた豊かな土地であったと史料には見える。五胡のなかではもっとも遊牧国家に近かった大夏がさらに南方の農耕地帯を征服していく過程に、小規模な征服王朝の形態を見だし、さらに

それは華北を最終的に統一した北魏にも近いと考える。筆者が五胡十六国の国家形成にも多様性、地域性があったと見ているのは、大変卓見であると思われる。ここでも胡漢を単純に対立させ、また融合させることはしない。歴史地理学者の故史念海氏の業績を五胡十六国研究のなかで着実に継承し発展させているのは、日本では筆者が唯一であり、大変評価される業績である。大夏がオルドス（遊牧地区）から黄土高原（半農半牧地区）、関中平原（農耕地区）へと拡張し展開した歴史をふりかえる。五胡のなかで筆者がもっとも力を入れた考察のように思われる。自然科学、地理学の研究成果をよく取り入れて、対象とする時期における中国華北の自然環境の変化をよく説明している。

第四部「華北における牧畜民と牧畜業」では、筆者の牧畜という生活形態への深い見識から独自の遊牧国家論を披露し、五胡十六国時代の華北が大きく変化したことが述べられる。牧畜には定住放牧と遊牧とがあり、地域によって様々なバリエーションがあったとの指摘は、五胡十六国の議論では重要である。モンゴル高原の匈奴や鮮卑は純粋な騎馬遊牧民であり、山西地域では農地と牧地がモザイク状に混在しており、チベット高原から移ってきた氐・羌は小規模移動牧畜と農耕を組み合わせた生活形態をとるといふ。五胡を遊牧民として一律に考えてきた私たちの浅薄な見方が崩される。対立でも融合でもない胡漢の複雑な関係は、牧畜と農業の混在している状況にも似ているのかもしれない。華北における胡人の人口も予測以上に多く、華北東部では漢人と胡人の人口比は1対1まで伸びていたという。遊牧民は寒冷化の気候変化によって南下したが、五胡諸国家は政策として征服民を積極的に移住させた結果でもある。

新しく作り出された農牧交錯地域に注目する研究は、筆者以外にも近年目立ってきている。唐代史の石見清裕はオーウェン・ラティモアのリザーヴァー理論を援用し、漢人・非漢人雑居のベルト状地帯に注目し、妹尾達彦もユーラシア全体に連なる農業・遊牧境界地帯を強調し、また古代突厥ウイグル研究の森安孝夫は農牧接壤地帯と表現する。筆者の研究はこうした地域を最初に作り出した五胡十六国時代に焦点をあてた意味で重要である。隋唐以後の中国は新しい中華というべきあり方を示し、それを成し遂げたのは五胡十六国時代に活動した遊牧騎馬民族であるという鮮明な主張で貫かれている。唐代史の石見、妹尾の見解を受け入れながら、それを補うとともに、より遊牧民的あり方の存在を強調している。

『五胡十六国時代遊牧民研究』と題した本研究に収められた個々の論考は、日本の五胡十六国研究にとどまらず、中国においても大きなインパクトをすでに与えてきている。筆者の博士論文を構成する論考は、初期のものと最新のものと間には20年近い開きがあり、論文の成熟度には差が認められるが、それは当然研究上の進展を示すものである。それはまた日本における五胡十六国史研究の発展と重なるものでもある。全体が公刊されれば日中の学会に反響をもたらすことは間違いない。

以上審査委員会は全員一致で論文博士にふさわしい内容であることを認めた。

論文審査委員： 主査 鶴 間 和 幸 教授
武 内 房 司 教授
窪 添 慶 文 特別非常勤講師
(お茶の水女子大学名誉教授)